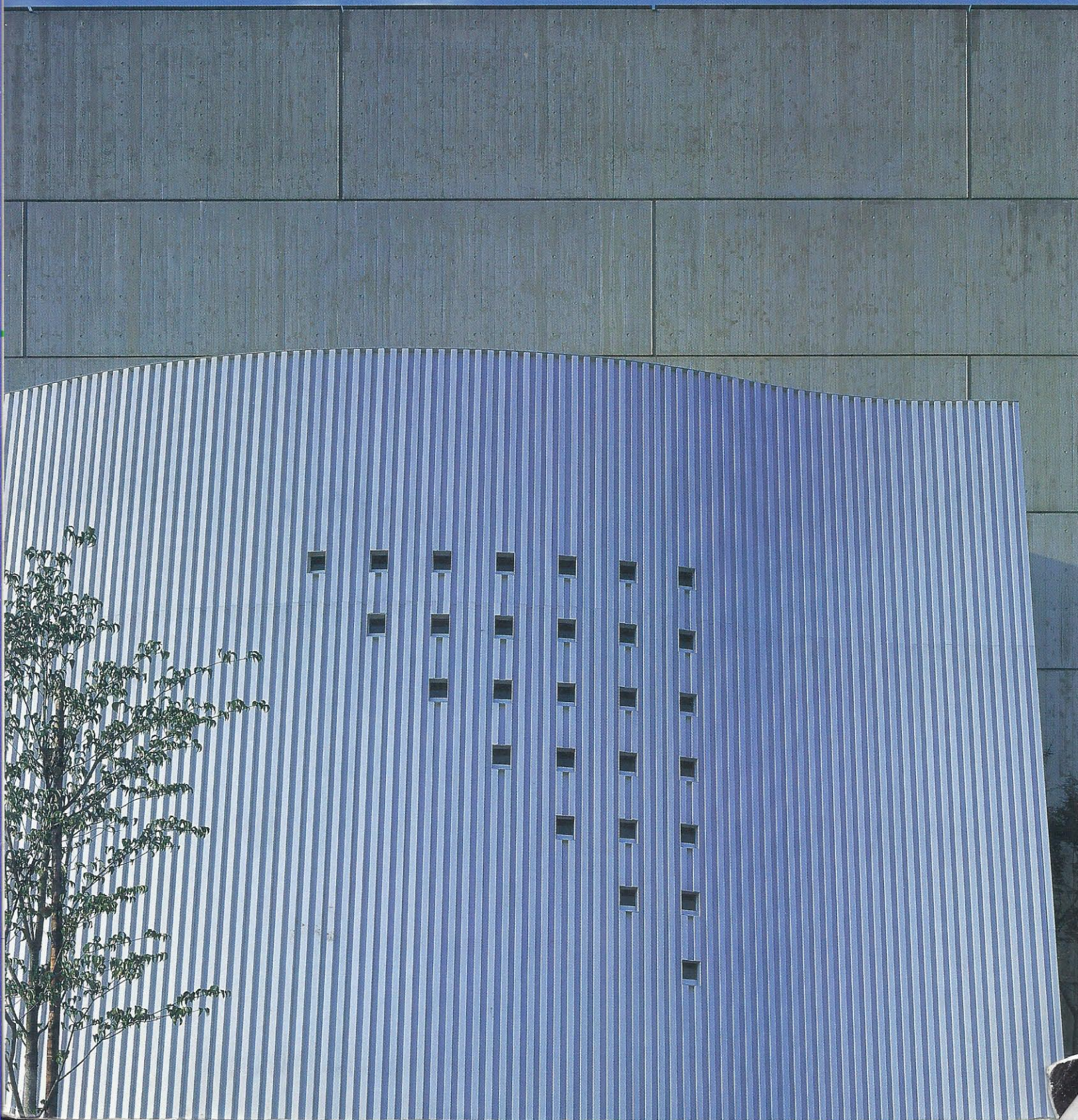
新建築

SHINKENCHIKU:2000

8



向島ワークショップ
ポリカーボネートの家

大塚彰宏 + ルカ・ポンチェッリーニ + アンドレア・ヴォルペ

「向島ネット」への参加,「空地利用」の提案

「ポリカーボネートの家」は，5月に東京・墨田区の下町で開催された「向島ネット」ワークショップのひとつのプロジェクトとして建てられた．このワークショップでは，世界中の建築家・建築学生・アーテストによるプロジェクトを，東向島・京島地区随所の空き地（柵で囲われたまちづくり事業用地）で展示したり，地元の子供たちとのワークショップを企画することにより，地元住民を含めたすべての参加者に，この地区の再発見を促し，またその参加者たちと交流することがその目的であった．

（URL: http://www.mukojima.cjb.netを参照）

今回のワークショップでは，オーガナイザーを務めている東京大学博士課程のティトゥス・スプリーからこの話を受けたステファノ，ラシャポン，大塚の日本在住組３人は，ステファノの知人で，かねてから日本的な半透明性に惹かれ「ポリカーボネートの家」の案をあたためていたイタリア人建築家アンナをはじめとする3名に来日してもらい，計6人でこのワークショップに参加することとなった．

今回のワークショップで与えられる敷地は，下町の家屋が建ち並ぶ中の「空地」．まちづくり事業の名の下，柵で囲われて何にも使われていない（現実的に利用できない）「空地」である．木造密集地という現状と建築に関する法律の矛盾，借地権など土地の所有者の問題など，与えられた敷地には新しく建設されない，「空地」であるための複雑な要因を秘めている．さて，われわれはここで何を提案できるであろうか．

われわれは，周辺の街並みを観察することから始めた．そしてふたつの印象深い光景を発見した．ひとつは隅田川沿いに建ち並ぶホームレスの人たちが建てたダンボールハウス．そしてもうひとつは，夜になるとどこからともなく現れる屋台の列である．われわれには，これらのダンボールハウスや屋台が，東京の現代建築の先端にあるように思えた．コンセプト明快，フレキシブル，合理的，そしてなによりも留学生の目にはこのことが非常に日本的で知的に映った．

また，東京でのひとり暮らしの学生にとって，ガイジンの友達が日本に遊びに来たとき，６畳１間の部屋に彼らを泊めることはとても難しい．そこで，ホームレスのダンボールハウスにヒントを得た仮設住宅を建てれば，彼らの住まいもできて一石二鳥だということになった．これが，このプロジェクトの始まりである．

ポリカーボネートの家

「ポリカーボネートの家」は，簡単に組み立て，分解，移動できる，２人用ゲストハウスの仮設ユニットである．

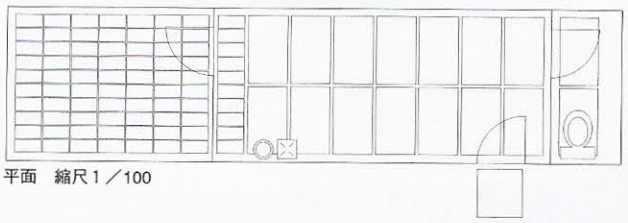
この簡単なコンセプトから出発してデザインを詰めていった．まず材料には強度・断熱性・光の透過性などの観点から，ポリカーボネートを採用し，接合にはその形状を生かしたシステムを考えた．基礎を除いてフレームなどの構造材はいっさい用いず，完全に自立させ，基礎の部分で木枠にネジ留めし，屋根の排水のため，全体的に２％の勾配をつけた．屋根と壁の接着にはシリコンを用い，防水のためにそれぞれの接合部には透明テープで補強した．

平面は非常にシンプルなものである．側面のドアを入ればそこは中庭であり，右側にトイレ，左側にはキッチンがあり，その奥に寝室がある．中庭は必要に応じてスクリーンで覆うことができる．

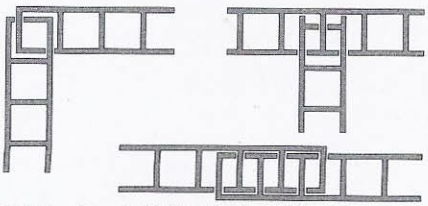
床にはコンクリートブロック（寝室部）と近所から拝借した庭の敷石を用い，ブロック下部にはビニールシートを，上部には透明シートを敷き詰めることにより，地面からの湿気を遮断した．

日中に室内がオーブン状態になることを避けるため，寝室部外側にアルミマットを取り付

墨田区京島の風景．



平面　縮尺１／100



ポリカーボネートの断面を利用した接合

けられるようにし，換気のためのスリットを設けた．さらに睡眠中の蚊の襲来を防ぐため，布団の上部には蚊帳がつられている．
設備に関しては，電気と水道を引き込むシステムを備えており，近隣から供給してもらうこととした．（今回は京島の町会長さんにお世話になった．）
こうしてできあがった家は，洗濯機やトースターのような，ある種家電製品のような様相を呈している．必要不可欠，機能的，余計な飾りは一切ない．好きな場所を見つけたら，即組み立て，コンセントと水道につないで，即入居．低コストでも，生活の質は最低限保証されているのだ．
また，低コストとはいえ，家が人に与える感情や感覚を常に意識することを放棄したわけではない．われわれは材料やその効果，新しい使い方・接合法まで議論した．形態についてもいろいろな討議がされた．このプロジェクト完成後，ラシャポンの計らいで伊東豊雄氏に講評していただくことができ，「材料を最大限に生かし，人びとの五感を総動員させるために いかに表現的でない表現をするか」という点でわれわれの意見も一致した．

コミュニティの協力

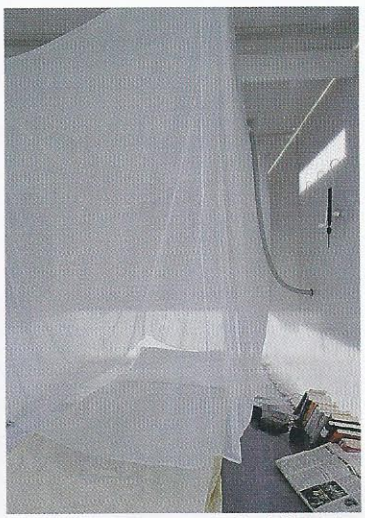
現地で作業をしている間，われわれは地元の人びとの注目の的であった．はじめのうちは，やはり怪しまれていた．当然である．正体不明のガイジンたちが近所の空き地で何やらごそごそしていることを想像してもらいたい．警察を呼ばれても仕方のない状況であろう．しかし，われわれの説明のかいもあり，少しすれば，温かく見守ってくれるようになった．多くの人たちが毎日のように足を止めて作業の進捗状況を見守り，声を掛けてくる人も多かった．また，石を運ぶ為の台車や夜間の作業のための照明などを快く貸してもらったり，時には，暖かいお茶の差し入れをご馳走になったこともあった．
そして，オープニング・パーティには当然彼らも招待したのだが，多くの方に足を運んでもらい，中には賞賛してくれる人もいた．
デザイン自体は強く主張するものではなく透過性をもった単純な箱であるが，日頃何気なく通り過ぎている「空き地」を意識してもらうことも十分にできたのではないだろうか．
われわれが彼らのコミュニティに入りこむことは決してできないが，それでもその雰囲気を感じることは十分にできたと思っている．
夜になれば住人の影をかすかに映し出す美しい街灯に姿を変える．そして，「ポリカーボネートの家」は世界を旅する．

データ
所在　東京都墨田区京島（2000年5月26日～6月4日）
費用　総額約35万円
床面積　16m²
ヴォリュームサイズ　2×8×2m
構造　2×2m t=10mm ポリカーボネート板（ツインカーボ）
木製フレーム（基礎）
「ポリカーボネートの家」URL：
http://www.cliostraat.com/tokyo/pchouse/go.html

プロジェクト・メンバー
Anna Barbara（アンナ・バルバラ）／1968年イタリア生まれ／建築家・デザイナー．現在ソウル国民大学，ミラノ工科大学で教鞭をとる
Rachaporn Choochuey（ラシャポン・シューショイ）／1970年タイ生まれ／コロンビア大学にて修士号取得後東京大学大学院博士課程／アジア近代建築史専攻
Stefano Mirti（ステファノ・ミルティ）／1968年イタリア生まれ／デザイナー集団「Cliostraat」メンバー／２年前に来日し現在多摩美術大学講師
大塚 彰宏（おおつか・あきひろ）／1976年大阪生まれ／東京大学大学院修士課程在籍
Luca Poncellini（ルカ・ポンチェッリーニ）／1974年イタリア生まれ「Cliostraat」メンバー／現在トリノ工科大学で卒業論文を執筆中
Andrea Volpe（アンドレア・ヴォルペ）／1968年イタリア生まれ／現在フィレンツェ大学にてT.A.，博士論文執筆中

夜景．

リビング．


寝室．

撮影：本誌写真部．